令和４年度 12 月号　　令和４年 11 月 28 日発行
横浜市立東汲沢小学校

“輝け！ひぐみっ子” だより

～東汲沢小学校教育目標「 学びあい 高めあい まちとともにあゆむ ひぐみっ子 」～

☎861-5531　https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/higashigumisawa/

まちとともにある心の原風景【師走】

校 長　丹 羽 正 昇

私の郷里は、愛知県西部にある名古屋というところです。育った家は、名古屋駅からほど近く、長らくプロ野球チームの中日ドラゴンズのホームグラウンドであった、いまは専ら二軍の選手が使用している「ナゴヤ球場」に隣接しています。通った小学校も、ナゴヤ球場のお隣にあって、まちを走る私鉄の駅名は「ナゴヤ球場前駅（いまは違う駅名）」。普段は一時間に4本程度ある普通列車しか止まらないのに、試合がある日は試合開始から終了までの時間、全ての列車が止まるという駅でした。そんなまちですから、小学生になると多くの子どもは、少年ドラゴンズに入会したり、野球チームに入っている入っていないに関わらず、かぶっている帽子がドラゴンズのそれといったりした具合。小学校の職員にも、ドラゴンズファンはたくさんいたようで、試合に負けた翌日は、なんだか学校全体に元気がなかったように思います。（おそらく思い過ごしでしょうが、小学生の私にはそう見えました）

そんなまちに育った私が、いまでも思い出す風景が、師走のナゴヤ球場なのです。試合をやっている活気のある球場ではなく、人の姿なんてほとんどない閑散とした球場周り。シーズンオフだから人がいないのではと思われるかもしれませんが、なぜか１２月には、人がいなかったのです。（年が明けた１月になると自主トレで球場を使う選手がいたり、２月のキャンプの時期になると、選手以外にも取材に訪れる記者がいたりしました）

どこか寂し気にたたずんでいるように見えた球場。当時、球場の敷地は金網で囲まれていて、金網と球場の外壁の間に、通路や駐車場として使われていたスペースがありました。そこには鍵などはかかっておらず出入りが自由。小学生の私は、そのスペースをピッチャーマウンド、球場の外壁をキャッチャーミットに見立て、時間ができるとプロ野球のピッチャーよろしくボールを投げ込んでいました。周囲にパーンと響き渡る音。試合がある日や、自主トレ、キャンプなど、人のいるときでは味わえない、大きな球場を独り占めにしている感覚。もちろん、今も昔も、やってはいけないことであり、（見つからなければよいということではありませんが）見つかればこっぴどく叱られ、外壁の塗装代等を請求される行為だったはずです。そうではありますが、師走の澄んだ空気を振動させた、私だけの秘密のピッチングが、自身の心も震わせていた記憶は、いまでも心地よいものであり、間違いなく私のお気に入りの風景の一つです。

人には、いつかの景色としての自分だけの原風景があるように思います。自分が生まれたり、育ったりする場所。それをまちと呼ぶのでしょうが、そこで思い出が生まれる。そんな人生の原風景は、常にまちとともにあるのだと、私は思っています。きっと、ひぐみっ子たちにも、自分だけの原風景が、ひぐみのまちで日々生まれているはずです。

私の原風景の話、実は続きがあります。誰もいない、誰も知らないと思って続けていた秘密の行い。実は多くの人が知っていたというのです。知っていたのは、まちの人たちでした。私の姿をどういう気持ちで眺めていたのか、それは分かりません。でも、確かなのは、まちの人の温かい心が、私の原風景をつくりだしているということです。まちの人たちが、自分の夢を応援してくれていた。その温かい気持ちに包まれながら子どもが育つ。周りの大人が、未来社会を創造する担い手である子どもに期待し、想いをもって子どもの成長を見守っている。いまのひぐみのまちの様相でもあります。

「まちとともにあゆむ　ひぐみっ子」 学校教育目標にその言葉をもつひぐみっ子やひぐみの職員は幸せだなあ。かつての師走の風景を心に浮かべながら、いま改めて思うことです。